

<実践研究>

諸本比較を採り入れた『平家物語』の授業実践

—高野本・延慶本の比較を通して「扇的」を読む（中学校第2学年）—

島田俊哉 長野県長野市立更北中学校
八木雄一郎 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：言語文化，古典に親しむ，諸本比較，主体的・対話的で深い学び

1. はじめに

中学校国語科における古典教育が目指しているのは、古典に「親しむ」姿勢の涵養である。新学習指導要領（2017（平成29）年告示，以下「新CS」）において、古典に関する内容は「我が国の言語文化に関する事項」において示されており、そこでは「言語文化」を「古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能など」とし、いわゆる古典文学を含めた「伝統的な言語文化」に児童生徒が「親しむ」ことを従来通り重視している。

しかし、新CSが「古典に親しむ」態度の育成を謳う一方で、「古典嫌い」の生徒が依然として多いのも現状である。「古典嫌い」の背景としてしばしば指摘されるのは、古文や口語訳の暗記に偏った指導の問題や、「古典を学ぶ意義がわからない」といった学習者の意識の問題である。後者については、昨年「古典は本当に必要なのか」という公開シンポジウムが開かれ、話題を呼んだ¹。

前者の指導方法の問題については、口語訳を中心に人物の心情や場面の読解の追究を念頭に置くことで解消を図る実践が多い。確かにそうすれば、作品自体への興味は喚起できよう。しかしそれは一方で「口語訳があるならわざわざ原文を読まなくてもいいのではないか」という原文軽視の姿勢を助長することにもならないだろうか。

そもそも「古典に親しむ」というのは、学習者のどのような姿を想定すれば良いのか。こうしたことを問題意識とした上で、前掲の学習指導要領の「受容」という文言、そして諸本の存在に着目し、『平家物語』の「扇的」を教材とした単元を構想した。

なお、以上の問題意識の根底にあるのは、小学校と高校のはざまにある中学校段階においては「何を」「どこまで」学ばせるべきか、学ばせることができるかという問いである。「伝統的な言語文化」の学習指導は、小学校から高校まで一貫して「古典に親しむ」ことを主眼としているが、当然のことながらその「親しむ」の具体的意味は、学校段階によって変わってくるはずである。新CSの指導事項を概観すると、小学校の場合は、音読などの言語活動を通して古典を体験していくことが大事にされ、高校では、文学史や文法的知識をもとに、より深く古典を読み味わうことが求められることになる²。それらの中間にあり、いわば橋

渡し的な位置にある中学校が果たすべき役割とは何だろうか。おそらく体験だけで終わらせるわけにはいかず、しかも品詞分解などをするには早すぎるだろう。そういう問いが、つまりは中学校国語科における「古典に親しむ」ことの内実をめぐる模索が、本実践の根底にはある。今回の実践を通して得られたこの試行錯誤の成果については、結論部において述べることとする。

2. 諸本比較を採り入れた『平家物語』教材および実践の現状・課題・可能性

2.1 『平家物語』教材の現状

『平家物語』といえば、日本の古典文学の中で最も有名な作品の一つであり、中学校国語教科書においてもほぼ全社が採録する定番教材である。それに比例するかたちで実践事例も枚挙に暇がない。『平家物語』は、信濃前司行長という人物が源平合戦に関わる諸事を盲目の僧生仏に伝え、琵琶法師が諸国に語り、広められたと一般的には理解されている。そうした所謂「語り物」としての側面を重視したためか、群読や朗読劇を追究する中で読みを深めていくという実践が多い。あるいは、個性豊かな登場人物に着目し、その心情に焦点を当てながら、当時の武士の価値観に迫ろうとする実践も多い。

『平家物語』を教材として扱う際に音声や人物に目を向けていくことは、その成立過程や内容を鑑みれば当然である。一方で『平家物語』を「語り物文芸」としてことさらに強調していく姿勢については、安野(2008)の批判もある。そうした中で注目していきたいのは、諸本の存在である。古典文学の研究において、諸本の研究は「諸本論」という分野として位置づけられるほど重要なものであり、その意義について松尾(2015)は、古態の追究だけでなく、流動する文芸の実態をとらえ、文学の可能性を広げる点にあるとする。諸本をそれぞれに読むことが「テキスト論」「読者論」の往還となるという松岡(2011)の指摘も見逃してはならないだろう。

『平家物語』は、古典文学の中でもその諸本の数が非常に多いという特徴を有している。故に、諸本に触れるということは『平家物語』の深奥に迫り、古典の本質に「親しむ」ことに寄与する活動だといえないだろうか。諸本比較は、古典文学研究の一手法であるからといって必ずしも難解な学習活動というわけではない。たとえば学習指導要領において重要性を増している「比べ読み」の指導法のひとつとして捉えることもできるだろう³。以上のことから、諸本比較を授業の言語活動として採り入れることには、今日の、そしてこれからの国語科（特に古典教育）のあり方を考究していく上で大きな意義があるといえよう。

さて、『平家物語』の諸本には、大きく分けて「語り本系」と「読み本系」の2つの系統が存在するとされる。ごく簡単にまとめれば、「語り本系」は琵琶法師が語ったものを書写し、「読み本系」はその「語り本」に加筆するような形で読み物としての側面を強めたものであるとされている。但し、「語り本系」と「読み本系」には相互に影響し合った箇所が窺えるため、どちらが古態を有するかは未だ判然としない。『平家物語』を教材として採用する現行の教科書は、全てが「語り本系」に属する「覚一本」と同系の「高野本」を底本とし

ており、「読み本系」のものを底本とする教科書は管見に入る限り確認できない。また、指導書においても「その成立経緯は複雑で、増補・改訂など含めて多くの人々の関与が考えられる」という程度で、明確に諸本について言及した記述は見られない。

2.2 諸本比較を採り入れた実践の有効性と課題

そうした中で、今井(2014)は『平家物語』を教材とする際に諸本を活用する有効性を以下のように述べている⁴。

覚一本の問題は覚一本に即して考察すべきであろうが、それが困難な個所は、同じ状況設定を行っている、他の語り本系の表現を参照するのが順当であろう。中学生に対しても、事典などによる語釈（これも厳密に言えば外部の知識の持ち込み）の延長として、“『平家物語』にはたくさんの種類があり、ここをこのように描いている本もある”と説明し、考えさせることは可能であり、意味のあることではなかろうか。

武田(2015)も今井を踏まえた上で、『平家物語』の指導の際には諸本の存在を教員側が知っておくことの必要性を説いている。さらに鈴木(2017)も「扇的」「敦盛最期」を例にして諸本を意識した授業設計について提案を行うなど、徐々に中学の古典教育における諸本の活用が具体的に提言されるようになってきている。

このような先行研究の蓄積を通して、『平家物語』実践において諸本比較を採り入れることの課題と可能性が少しずつ明らかになってきているように思われる。たとえば前掲の鈴木は、高野本と延慶本を比較した「扇的」の授業の成果について、以下のように述べている⁵。

『平家物語』における語り本系統の高野本と読み本系統の延慶本とでは、表現の仕方や叙述内容に大きな違いが看取された。(中略)今回この延慶本を比較本文とすることによって、『平家物語』は一つに定まっていなかったという事実が分かっただけでなく、教科書の本文とは異なる筋立てがあることを知ったはずである。那須与一が二度弓を射た、それぞれの時点の心情が大いに異なっていたことも理解できたはずである。

鈴木の提言は、「語り本系」と比べて人物の様子が詳述されている「読み本系」を参照することで、生徒は「語り本系」の叙述だけでは読み取ることが困難な与一の心情を知ることができることを示している。これは諸本比較を採り入れた実践のひとつのあり方として大いに参照すべきである。

ただし、異なる作者によって書かれた両系統の諸本を「良いとこ取り」のように都合よく参照する姿勢には、疑義を呈したい。「語り本系」と「読み本系」のどちらが古態を有するののかについてはいまだに判然としないところがあり、「読み本系」の作者が「語り本系」に私積として増補を加えた可能性も否めないのである。諸本比較を採り入れる授業とは、「教材」としてよりも以前に「文学作品」として積み上げられてきた研究成果を援用する実践なのだから、専門的な文学研究の眼にも耐えられるような、精密かつ慎重な文献の取り扱いや比較をしていくことが、留意しなければならない事項となるはずである。

諸本比較というアプローチを通して学ぶこととは、一方の伝本だけでは窺えない記述を参照することによってあるテキストの内容をより豊かに捉えるということにはとどまらない。例えば、鈴木実践における問題点を逆手に取るならば、一種の「メディアリテラシー」を学ぶ教材としても活用することが期待できよう。諸本同士の相違点から写し手（語り手というべきか）が抱えるイデオロギーにも迫れるだろう。そうした営みは、作品がどのように享受されてきたかを考える契機となり、新CSで述べられている「受容」にも連なるものになりうると考える。

2.3 諸本比較を活用した実践例

諸本比較の活用が提言されてから間もないせいか、諸本比較を活用した『平家物語』指導の実践例は少なく、管見に入る限り、3例のみしか確認できなかった。しかしこの3例はいずれも着目・参照すべき要素を多分に備えている。

まず、長岡市立江陽中学校と新潟市立大江山中学校の2例である⁶。いずれも「敦盛の最期」の場面で、教科書本文と異本を比較し、異本にのみ書かれている記述から人物や場面を読み深めるという活動を行っている。注目すべきは大江山中学校の実践で、単元終末の活動として「二つの平家物語を比べて、自分ならどちらを後世にのこすべきか理由を挙げて考えを書こう」という活動を行っている点である。これは、学習者自身が古典の「享受者」と同時に「伝達者」であることを自覚させることを企図した、まさに「古典に親しむ」ための単元であり、今回の授業構想にも活用している。

そして先駆的な実践といえるのが金子(2008)である。金子も前2例と同様に「敦盛の最期」における諸本比較を行っている。『語り手のものの見方』を『私たちのものの見方』から『批評』するというテーマで作文をしたことで「自分の『読み』の傾向に気づくという経験」をさせ、『物語』と『自分の読み』との相互作用や対立関係から、私たちにとっての『読む』ということの本質について考えさせるところまで到達している。第一筆者の実践においては、時間数や生徒の実態から同様の活動は行えなかったものの、「自分の『読み』の傾向」を自覚させるという視点は大いに参考とすべき点である。以上まで述べてきたことを念頭に、「高野本(教科書本文)」と「延慶本」を活用した単元を次節のように行った。

3. 単元構想

○単元名

いにしへの心を訪ねる 『平家物語』扇的(光村図書 国語2)

○単元の目標

- ・「語り本系」特有の表現、リズムに気付き、特徴を意識して音読することができる。
- ・作品の世界観や作中人物の生き方に触れ、場面を読み深めることができる。
- ・諸本の比較を通して作品に対する理解を深めることができる。

○評価規準(◆)

【学習指導要領の目標及び内容】

「我が国の言語文化に関する事項」

- ア 作品の特徴などを生かして朗読するなどして、古典の世界に親しむこと。
- イ 現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ること。

「C 読むこと」

- イ 目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈すること。
- エ 観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えること。

- ①「語り本系」の特徴をつかんで朗読している。(言語文化ーア)
- ②登場人物の置かれた立場を理解しながら読み、人物の心情について自分の考えをもっている。(読むことーイ)
- ③作品に表れているものの見方や考え方について、根拠を明確にして自分の考えをもっている。(言語文化ーイ)
- ④諸本のそれぞれの違いを読み取り、違いから分かることについて自分の考えをもっている。(読むことーエ)

○単元展開（全7時間）

今回は単元の前半に教科書本文に即して場面の状況や人物の心情を読解し、後半に発展的な活動として異本を提示して読み比べる活動を行った。「扇の的」は、「敦盛の最期」と比べて、教科書本文と異本を読み比べた際の人物像の変化が大きい。例えば、教科書本文では与一は義経の命に忠実であり、「年五十ばかりなる男」を射殺することにも躊躇がないが、比較対象とした延慶本では、周囲の兵士の言葉に右往左往する様が描かれている。こうした変化の大きさは「いずれの伝本を残すか」という問いに対して、学習者たちが多様な考えを生み出す上で有効に働くことが期待される。

また、大江山中学校の「残したい伝本を考える」という活動を取り入れつつ、今回は「自分が伝えたいものとして選んだ伝本」を再検討する活動を行った。より「我が事」として主体的に古典に向き合わせていくことはもちろん、諸本のもつイデオロギー的側面にも気付かせていくことをねらった。

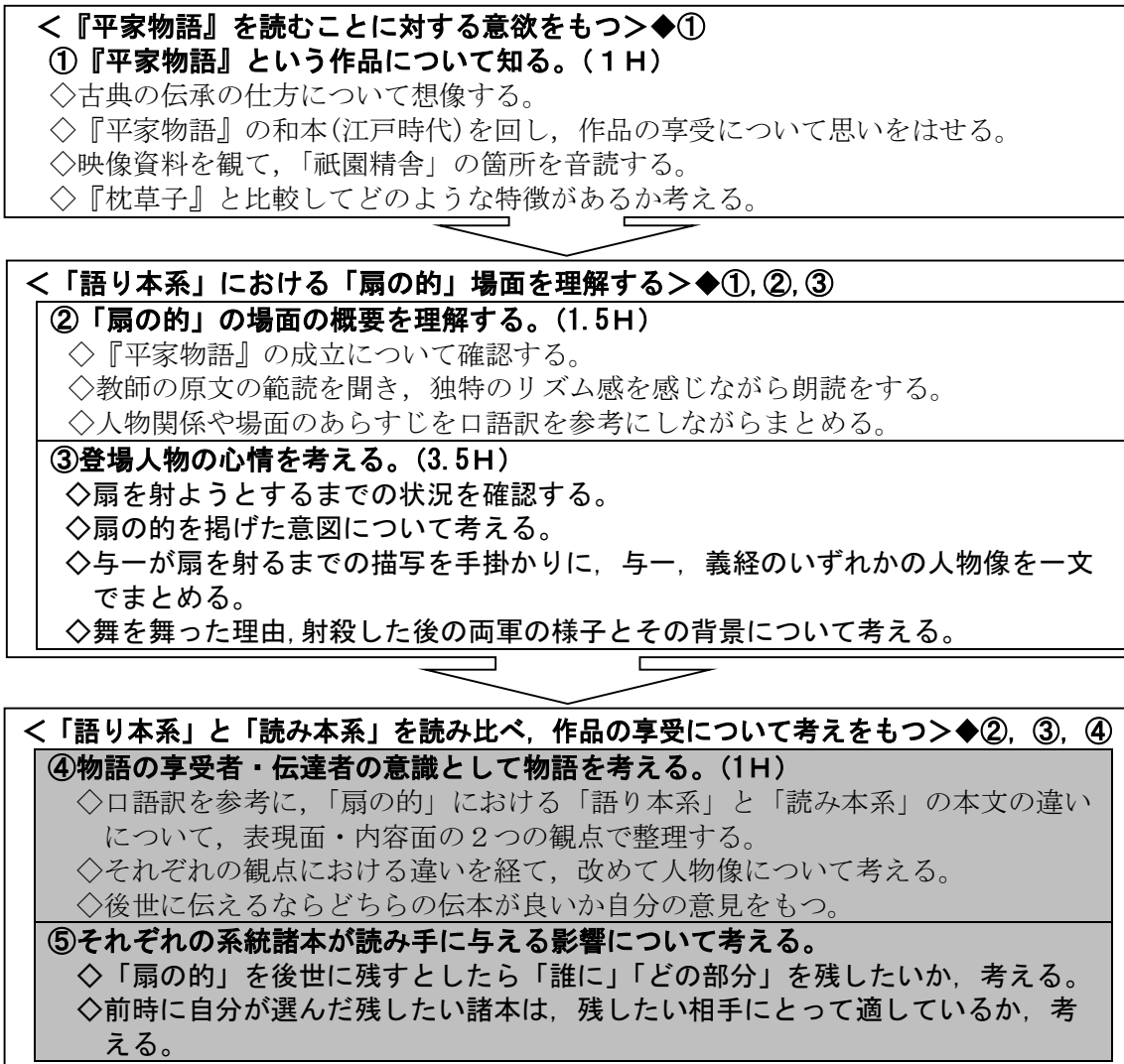
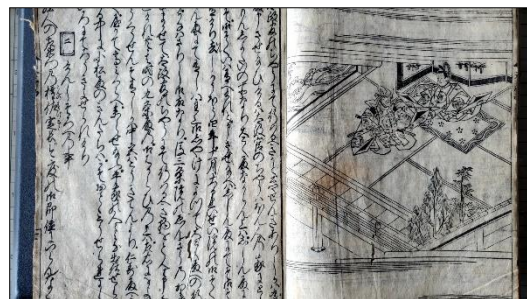


図1 本単元の流れ

4. 単元の実際

【第1時】①

古典が書写と口伝によって伝わってきたことを確認し、『平家物語』はその両方の側面をもつ作品であることをおさえた。そして、江戸時代の流布本を回覧したり、現代の「祇園精舎」の演奏を試聴したりする中で「享受」の過程を体験させた。最後に『枕草子』と「祇園精舎」の比較を行い、和漢混淆文やリズムカルな文体というテキストの特性に気付かせた。



資料1 回覧した江戸時代の流布本

柔不断な人」「実は悩みながら矢を射っていた」という新たな側面を発見することになった。最後に生徒たちは、二つの写本のいずれを残すかを検討した。高野本か延慶本か、どちらを残すかについては意見が割れ、「延慶本は詳しいけど、読みやすいから高野本」「延慶本は、どんな場面なのかが詳しく分かるから」というように、やはり自分の好みで主観的に選ぶ生徒が散見された。

<p>【メモ】</p>	<p>私が残すなら… () の『平家物語』だ。なぜなら、 () (だからだ。)</p>	<p>3 もしあなたが『平家物語』を残すなら、A(高野本)・B(延慶本)どちらを残したいか。理由とともに書いてみよう。</p>	<p>()は ()は 【根拠】(複数でもOK) 【理由】(複数でもOK)</p> <p>(な人物である) (と書かれている) (だからだ。)</p>	<p>2 A・B二つの文を比較した上で、今までと印象が変わった(または理解が深まった)人物がいれば、改めてその人物について人物像を書いてみよう。</p>	<p>1 A・B二つの文の共通点・異なる点を、文章の特徴・内容の観点から考えよう。</p> <p>【文章の特徴】 共通点 異なる点</p> <p>【内容(話の展開)】 共通点 異なる点</p>
-------------	---	---	--	--	--

資料3 生徒に配付したワークシート①

【第7時】⑤

まず「誰に」「何を」伝えたいかを整理し、それに対して前回自分が残したいと感じた写本は適しているのかということを考えた。相手意識をもたせることで、より視点を明確にして原文を読み直させることをねらった。また、最後に自身の読みを相対化していくために、以前自身が選んだ写本は今の自分の考えと合っているのか検討させた。以下数例を紹介する。

<p>【理由】 (合っている・合っていない)</p>	<p>2 1 で考えた「伝えたい相手」に対して、自分が残したい『平家物語』(A・B)は合っているだろうか。理由とともに説明しよう。</p> <p>なぜなら () から どこ () を伝えたい。 誰 () に</p>	<p>1 あなたが『平家物語』を残すとしたら、「誰に」「どこを」伝えたい(読んでもらいたい)か。</p>
--------------------------------	--	--

資料4 生徒に配付したワークシート②

<合っている>

A 生…選択した写本：A（高野本（教科書版））

- ・誰：将来読む人たち。
- ・どこ：権力やプライドのために簡単に射殺した所。
- ・理由：昔簡単に人を殺していたけれど、今みたいに簡単に人を殺さない時代を続けていてほしいから。
- ・合っている理由：Aの方が与一や義経の非情さが感じられるし、リズムカルで読みやすい。子どもが読むのにも良いから。

B 生…選択した写本：B（延慶本）

- ・誰：未来に学校で「平家物語」を学ぶ人。
- ・どこ：Bの文章の周囲の「射よ」「射るな」という声に左右されながらも、最終的に自分で射ることを決め、見事に射倒した所。
- ・理由：与一は最初、周囲から色々な意見が聞こえてきて射ようか、やめておるか迷ったけど、自分で決めている判断力が分かるから。
- ・合っている理由：Aは命令だから仕方なく射った感じであんまり自分で決めている様子が分からないけど、Bは周囲の声に左右されながらも決める判断力の強さが分かり、自分で物事を判断する力の必要性を学んでもらうため。人に左右されてはいけないというのを教えるため。

C 生…選択した写本：B

- ・誰：今、年少や年中くらいの小さい子たち。
- ・どこ：Bでの与一のあまりかっこよくない姿がたくさんあって、思ったこととか周りの意見を聞いて行動することなどが、人間らしく感じたので、これを伝えたい。
- ・理由：昔の物語などをあまり知らない子たちは、「昔の人はすごい」という印象を持ちがちだけど、本当は今の人たちと変わらずおくびようだったはずだから、飾らない姿を読んでほしい。
- ・合っている理由：Aは、起こったことなどのできごとがたくさん書かれているけど、Bは与一が思ったこと、「射よ」という人が多くなったから射たことなど与一の行動が詳しく書かれているから。

<合っていない>

D 生…当初選択していた写本：A

- ・誰：この先の世界を創っていく人々。
- ・どこ：与一が主君や、その他の人を尊重して行動していること。
- ・理由：日本人特有の相手を尊重する気持ちが大切だと感じて欲しい。
- ・合っていないと感じた理由：高野本の方が与一は義経の命だからこそ扇も男を射たことが分かり、自分より上の立場の人を尊重していることがよく分かるから。

E 生…当初選択していた写本：B

- ・誰：まだ読んだことがない人。
- ・どこ：そのとき伊勢三郎義盛が～舟底へ真っ逆さまに射倒した。
- ・理由：この場面で義経の絶対的な権利、扇よりも的が大きくなってちゅうちょしない与一の強さが一度に分かる。
- ・合っていないと感じた理由：義経が与一に対して命令をしないので、自分が伝えたいことが描かれていないから。

相手意識をもって双方のテキストを読み直したことにより、選択の理由として、現代社会の状況に引き寄せたものが多くなり、また、人物像から自身が何を学び取ったのかを自分や周囲の状況と照らし合わせて言語化するものも複数見られた。そして行った再検討を通して、双方の本文の特性がより明確に認識されるようになった。比較をすることには、新たな情報を外部から獲得するというだけでなく、元の文章の特性をより鮮明に浮き上がらせるという効果があることも、今回確認されたことのひとつである。

そして、各自の考えを交流させることによって、それぞれの諸本の書き手が意図的に加筆省筆を行っており、それによって異なる感想を読み手に抱かせているのだということを実感していく様子が学習者たちの中に見られた。最後に、それぞれの諸本が描きたかったものは何だったのかということについて問うと、「A（高野本（教科書版）は平家が無残に殺された悲しみというか、無常観」「B（延慶本）は義経や与一の怖さをおさえて書いている」というように、諸本が有するイデオロギー的側面にも迫る発言が出てきた。その後、授業者の方から延慶本末尾にある頼朝礼賛の記事を紹介し、やはり諸本には一定のイデオロギーが含まれているということを確認して本単元を終えた。

5. 授業後のアンケートから

今回提案した実践を、担当している二学年の2クラスを対象に行い、単元終了後にアンケートを実施した。質問の項目は以下の通りである。

表1 授業アンケート項目

- Q1 「扇の的」の学習で教科書以外の「扇の的」と比較したことは、自分が古典を学ぶ上で良い影響（例：古典をもっと学んでみたくなった・古典を読むのが楽しくなった）はありましたか？
- Q2 文章を読む時に、関係する他の文章と比較することは必要だと思いますか？
- Q3 (Q2で「とても思う」「思う」を選んだ人は) Q2の答えに今回の授業は影響していますか？
- Q4 教科書の文章と別の文章とを読み比べる授業をまたしてみたいですか？

上記項目に対して「とても思う」「思う」「どちらとも言えない」「ほとんどない」「全くない」の五段階の回答を選択し、回答の理由を記入させた（なお回答数は57人）。

諸本比較を採り入れた『平家物語』の授業実践

表 2 アンケート結果 (回答数 57 人)

	とてもあった	あった	どちらとも言えない	ほとんどない	全くない
Q1 比較による古典学習の意欲向上	12	35	5	3	2
Q2 比較することの必要感	8	39	4	4	2
Q3(Q2 について) 授業の影響の有無	6	36	1	3	0
Q4 今後も学習で比較をしたいか	8	31	9	6	2

表 3 各質問における理由 (抜粋)

	肯定的回答の理由	否定的回答の理由
Q1 比較による古典学習の意欲向上	<ul style="list-style-type: none"> 書く人が違うと物の見方がこんなに違うのだと知れたから。 1つの文章しか知らなかったのに、新たに知ることができて、内容に深く関わろうと思えた。 古文を最初に読んだときよく分からなかったけど、色々な面を知ることができて良かったから。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の「扇的」を理解できていなかったから、教科書以外の「扇的」を読んだらさらに分からなくなった。 比較すると楽しいが、整理するのが大変だから。 ストーリー性が違うので、理由とか説明とかどっちを基準にすればいいのか分からないから。
Q2 比較することの必要感	<ul style="list-style-type: none"> インターネットでも同じように、その情報が正しいか分からないから。読み比べれば、より正確な違いを見つけることができるから。 1つの情報だけに注目しても学びが深まらないので、楽しくないし、つまらないから。 比較をすることで作者の見方や出てくる人物の人物像も違ってくるのがおもしろいし、色々な方向から物事をとらえることもおもしろい。 	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの内容を整理するのが難しいから。 2つともあると頭が混乱してしまう。
Q3(Q2 について) 授業の影響の有無	<ul style="list-style-type: none"> これまであまり比較の活動をしてこなかったから、楽しかったから。 同じ場面なのに違うことがいくつかあるのが面白かったから。 前から西遊記など昔の作品は色々な人が書いているのがあるので、作者が違うもので比べてみたいと思っていたので、実際にやってみて面白かったから。 	
Q4 今後も学習で比較をしたいか	<ul style="list-style-type: none"> グループで意見交換をする時に盛り上がりすぎて楽しいから。 新しいことが知れて学びが深まるから。 似たものを比べて、違いを見つけた方が内容も印象に残るから。 今回やった比較が面白かったから。 	<ul style="list-style-type: none"> 元の内容を理解できていないと、難しいと感じたから。 教科書にあったやり方をしないとよく分からないし、自分だけでやるのは難しいから。 2つの文を頭にいれて混乱するよりは、1つの文について重点的に学んだ方が分かりやすいと思うから。

今回の実践により、およそ 8 割の生徒が肯定的な感覚を得たことが明らかになった。そして、それらの理由を見ていくと、多面的・多角的な見方を獲得できたことへの達成感が占めている。また、文章比較の必要感を向上させた要因として、多くの生徒が「活動自体の楽

しさ(面白さ)」を挙げている。やはり、学習活動そのものが生徒にとって魅力的であれば、必然的に学習効果にも寄与していく。いずれにしても、古典の学習において、諸本を比較していくことは有効な学習方法であることを確認することができた。

一方、否定的な回答の理由として目立ったのは、「比較することの困難さ」である。授業者の生徒への支援不足や、生徒自身に読み比べる力が十分に備わっていないことが原因と考えられる。実際、否定的な回答をしたほとんどが学力的に厳しい生徒であった。読み比べる力をつけることの必要性が間接的に示された結果ともいえよう。

6. おわりに

「アクティブラーニング」(「主体的・対話的で深い学び」)が叫ばれる昨今であるが、そこに必ずあるのは、「アクティブラーニングを採り入れた授業」というものが一種の「活動主義」に陥りかねないという懸念である。「ジグソー法」「ワールドカフェテリア」等々、様々な「アクティブ」な学習法が提案されている昨今の状況下において、今一度立ち返らなければならない考え方は、「対話的で深い学び」というものには、何も学習者同士の対話だけではなく、「テキストとの対話」も含まれるということだろう。

授業という場においてある教材・テキストを「教師から与えられたから読む」という生徒は存外多い。そうした姿勢のままに読んでいるうちは、授業者があれこれと手法を尽くしたところで、その授業・単元の内容が生徒自身の学びとして昇華されていくことはないだろう。重要なのは、テキストが語りかけてくるものを生徒自身が受け止め、テキストとの関係に主体性を持ちながら自ら考察を進めていくような授業や学習である。そこにこそ「主体的・対話的で深い学び」は生まれていくはずであり、同時に古典を「受動」ではないかたちで「受容」していく営みが生まれていくはずである。今回、諸本比較を採り入れた実践を初めて試みたが、授業者の当初の想定以上に生徒たちは主体的・積極的に取り組み、『平家物語』の作品の本質ともいえるところまで迫っていくことになった。古典を「我が事」として捉え、「テキストと対話する」姿が少なからず見られたのである。

さらに、序論において言及した「口語訳重視がもたらす原文軽視の懸念」についても、今回の実践を通して克服の見通しを持つことができたと考えている。本実践では、諸本についてその文体を観点として比較したことにより、口語訳から読み取れる内容だけではなく、原文(=古文)のあり方そのものにも着目する姿勢が学習者たちに見られたからである。やはり、古典の内容をスムーズに理解・把握させる上で口語訳の併記は欠かせないだろう。それがなければ学習者たちは、考察の焦点となる内容面に入っていくことができなくなってしまふ。その際に、課題の設定の仕方や授業者からの意識付けのさせ方に工夫・配慮を施すことが「原文軽視」を回避していくための方途となると思われる。

そしてこの工夫・配慮の如何は、中学校における「伝統的な言語文化」(=古典教育)の可能性を広げていくものであるとも考えている。序論において、中学校の古典教育においては「何を」「どこまで」扱うべきかが問われていると述べたが、今回の実践を経てその問い

に答えるとすれば、「中学校においても古典を原文で読ませ、そこから古典の内容について学ばせていくことは可能である」という提案ができるはずである。

高校ではやはり原文を読む・読めるということが必要とされるため、まさにそこへの「橋渡し」として中学校段階において原文に触れ、比較考察する体験は意味を持つ。さらにこの体験は、小学校段階において行う音読などの活動的体験よりも難度として高次なものである。したがって本実践は、小中高を通じた古典カリキュラムにおいて、その中間にある中学校が果たすべき役割について提案するものになっていると考えるのである。

なお、先掲の「古典は本当に必要なのか」についての公開シンポジウムにおいても、学習者たちに古典を現代語訳ではなく原文で読ませることの是非については、議論が尽くされなかったところがある。筆者としては、今日の古典教育において問われていることの核心は「古典を学校で教えるべきか」ということよりもむしろ、「それを原文で教えるべきか」の是非や程度であると考えており、先の提案はそれに対してもひとつの見解を示すものになっていると考えている。

本実践を終えて残された課題としては、時数の都合上、ここまでの読み取りをしながらも「書くこと」の活動まで繋げられなかったことである。次は、例えば金子(2008)のように、単元全体の学びを学習者自身が総括するような作文を書いたり、両方の諸本を参照してオリジナルの『平家物語』を創作したりする活動などを行っていきたい。

「教科書『を』教えるのではなく、教科書『で』教える」という、学校教育では決まり文句のように唱えられる言説がある。教科書「で」教えることは、何も教科書掲載の本文のみで教えるということではない。時には積極的に教科書外の文章と組み合わせながら、教科書本文をも相対化していく。そうした授業はもっと積極的に行われるべきであり、自身も教科書にとらわれずに教材の選択・開発をしていきたい。

注

- 1 2019年1月14日に明星大学日本文化学科主催で行われた。なお、シンポジウムの様子は <https://m.youtube.com/watch?v=P6Yx5rp9IU> にて公開されている他、書籍としても勝又基編(2019)『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』(文学通信)にまとめられている。
- 2 新CSにおいて高校国語科の必修科目となる「言語文化」においては「イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること」「ウ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること」という指導事項が立てられている。つまり高校国語科においては、品詞分解や知識の丸暗記に傾斜した古典の授業を忌避しながらも、それらの学習指導を行うこと自体は決して否定していないのである。
- 3 2008(平成20)年告示の学習指導要領では「C 読むこと」の「ウ 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること」(中学校第3学年)、2018年の学習指導要領では、「C 読むこと」の「エ 観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えること。」(中学校第2学年)となっており、「比べ読み」の重要性が鮮明になってきている。
- 4 今井正之助(2014)『扇的』考一『とし五十ばかりなる男』の射殺をめぐって一』『日

本文学』63巻5号, p.56

- 5 鈴木恵(2017)「古典教材の授業づくり—『平家物語』扇の的をめぐって—」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』9巻2号, p.29
- 6 新潟市中学校教育研究協議会「実践報告書 平成30年度」pp.11-13.
最終閲覧日:2019年10月2日 (http://www.niigata-inet.or.jp/ken-ckk/2018/02Publications/2019-03-15NiigataCityCKK_matome.pdf)
新潟県教育庁義務教育課「平成30年度 新潟県中学校教育課程研究」pp.16-17.
最終閲覧日:2019年10月2日
(<https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/132643.pdf>)

文献

- 安野博之(2008)「教科書で『平家物語』はどう読まれてきたか——「忠度都落」を例に——」『藝文研究』第95号, pp.290-301.
- 今井正之助(2014)「『扇の的』考—『とし五十ばかりなる男』の射殺をめぐって—」『日本文学』63巻5号, pp.54-64
- 金子直樹(2008)「国語科におけるリテラシーの授業 続—中学2年生の古典の授業—」『中等教育研究紀要 広島大学附属福山中・高等学校』第48号, pp.177-182
- 鈴木恵(2017)「古典教材の授業づくり—『平家物語』扇の的をめぐって—」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』9巻2号, pp.23-35
- 武田昌憲(2015)「『平家物語』国語教育の一側面—諸本のことなど—」『尚綱国文』第4号, pp.3-10.
- 新潟県教育庁義務教育課「平成30年度 新潟県中学校教育課程研究」最終閲覧日:2019年10月2日 (<https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/132643.pdf>)
- 新潟市中学校教育研究協議会「実践報告書 平成30年度」最終閲覧日:2019年10月2日 (http://www.niigata-inet.or.jp/ken-ckk/2018/02Publications/2019-03-15NiigataCityCKK_matome.pdf)
- 松尾葦江(2015)「諸本論とのつきあい方—平家物語研究をひらく—」『中世文学』60, pp.50-61.
- 松岡智之(2011)「『源氏物語』諸本の解説とテキスト論」『日本文学』60巻6号, pp.1-11.
- 光村図書出版株式会社編集部編(2016)『中学校国語 学習指導書 2下』光村図書
- 文部科学省編(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』, 東洋館出版社

(2020年 1月30日 受付)
(2020年 3月13日 受理)